

バ力はバ力のまま

小倉 一純

高校時代に彼女ができた。

その母親に僕が将来は作家になりたいという
うと、

「じゃー、うちの娘は、小倉君とは結婚させ
られないわね」

といわれてしまった。

作家、小説家などというと、良識ある大人
からは、ヤクザな商売と見なされていた。

明治時代の歴史を振り返っても、若者が大
作家のところに弟子入りを頼みにいくと――、
「君の家は財産家かね」とまず尋ねられたそ
うである。

作家などでは金は稼げない。身上を食いつ
ぶすだけだと相場が決まっていたからだ。

『銀河鉄道の夜』の作者である宮沢賢治も、
実家は商家で父親は裕福だった。三十七歳で
賢治が亡くなるまで、父親は息子の面倒を見
続けた。

二〇二五年の今、出版業界は不況である。
大手出版社でも、往時の半分以下の売り上げ

高となっている。ある新聞社は、以前は七千億円近い売上を誇っていたが、現在では二千五百億円ほどにまで落ち込んでいる。

その反面、ネット環境が整備されたことにより、作家志望者は以前の何倍にも膨れ上がった。つまり、現在では、作家で飯を食っていくことは、以前にも増して競争率が高いのである。もちろん、確率は低いけれど、チャンスはある。ネット環境は、どんな人にも、常に門戸を開いている。

そうはいつても、作家になること一本で、自分の将来を考えるのは、確率的に考えて、無謀といわざるを得ない。

彼女のお母さんはその辺のことをよく分かっていただろう。あんなことをいう僕が、娘の配偶者に相応しくないと考えたのは、むしろ当然のことだったといえる。

ひとこと付け加えるが、当時はまだ、出版は不況には陥っていなかった。むしろ、出版というサブカルチャーは隆盛で、この業界に

就職した同世代は、肩で風を切って歩いていった。だが、それは、作家を目指すこととはまた別の話である。

高校生の頃、僕は武者小路実篤の『友情』という作品を読み、熱烈なファンとなった。

その武者小路が「新しき村」というのを主宰していた。最初は熊本県にあったが、ダム建設による水没で、その後、埼玉県に移っている。

人間の基本は農業にあると考えるようになった武者小路が、日銭を稼ぐ養鶏と、年単の米作を中心に小さな村を拵え、そこで自給自足の共同生活を営んでいた。農業こそ人間の本性に根差しているのだ、というのがそんな武者小路の考え方だった。

僕はそれに大いに感化され、高校の教室で、毎日のように友人をつかまえては、

「俺さあ、武者小路実篤の新しき村の住人になるんだ！」

と吹聴して回っていた。僕は得意満面だっ

たが、卒業後、東大や医学部に進学したような友人たちは、

「小倉ってバカだな！」

と思っていたに違いない。

僕は数年前に還暦を回ったが、そのバカが、
今も直っていない。